
アイスクリーム。

濡れ煎餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイスクリーム。

【Nコード】

N5480L

【作者名】

濡れ煎餅

【あらすじ】

ホラー風味な、ちよいと不思議なお話です。

アイスクリームは、バニラに限る。

幼少の頃から、バニラ以外のアイスを口にすることがあまり無かった。もちろん、オレンジ味やメロン味などのアイスも試してはみたものの、やはりバニラ味が一番、しっくり、来る。アイスクャンディーなどの棒状のモノも悪くはないが、カップに入ったアイスの方が好みだ。

カップの蓋を取り、蓋裏に付いたアイスを一舐めする。行儀の良い行いではないが、これもまたカップアイスを食べる際の醍醐味の一つだと思う。お店から貰った木で出来たスプーン（へら？）で、アイスをさくり、と切り取り、口の中に入れる。冷たさと甘さが頭の中にまで広がりを見せ、この世に生を受けた事を大袈裟ではなく感謝したくなる。

2

陽が落ち、暑さが幾分和らいできた、7月のとある夕刻。

久しぶりに仕事を定時で終えられた私は、自宅の近所にあるコンビニで

夕飯の弁当とカップのアイスクリーム、そしてブラックの缶コーヒーを
1本を購入し、帰宅した。

夕飯の時間にはまだ早いが、なんとなく腹は減っている。しかもこの

暑さだ。喉も渴くし、冷たいものが欲しいと思った私は、食後のデザートにと買ってきたアイスクリームを食べてしまう事にした。もし食後にまた食べなくなったら、コンビニまで走ればいいだけだ。

最近のお気に入りの食べ方として、ブラックコーヒーとアイスを交互に口に入れるという方法がある。まずバニラの濃厚な甘さを堪能し、つぎに冷えたブラックコーヒーを一口飲む。こうする事で、バニラの味を何度も新鮮な気持ちで味わう事が出来るのだ。

冷凍庫からアイスを取り出し、グラスに氷を入れてコーヒーを注ぎ込む。自作の訳の分からない歌を口ずさみながら茶の間に戻り、アイスとグラスをテーブルの上に。気持ちを落ち着かせて、カップの蓋を取る。もちろん、蓋裏をペロリと舐め。うむ、いつもながら優雅で妖艶な甘さだ。

コーヒーを一口飲み、さて、アイスクリームを

目が合った。

……ううん、目があった。いや、間違っではない。

アイスの中央部分に、何故か「目」が一つ、埋もれてこちらを見ているのだ。

瞼や睫毛などは無く、アイスクリームに眼球が埋まっている、そんな状態のモノと、見詰め合ってしまったているのだ。

二度ほど瞬きをし、もう一度良く確認してみたが、やはり「目」はある。

私はアイスクリームから視線を逸らし、コーヒーをゆっくりと飲んでみて、それから考える事にした。何故、「目」が入っているのだろうか？大昔の

話だが、食品加工場で社員が機械に指を切断されてしまい、その指が食品と

一緒に加工されてしまった、なんて話を聞いた事はある。しかし、これは指ではなく、「目」、である。一体、どんな状況になれば、眼球とアイスと一緒に加工するというオチが生まれると言っのか。

それとも、この夏の目玉商品（文字通り）として食品会社がホラ一風なアイスクリームを発売し、それに気がつかずに手に取ってしまったのか。

いや、私はいつものブランドのアイスを買ったはずだ。蓋を確認し

てみたが
やはり間違いはない。

ふと、ここであるひとつの答えがひらめいた。

私はきつと、疲れているのだ。そう、最近はこのご時世にあって有
難い事に

残業が続いていたし、なにより今日の昼間の暑ささらなかった。
そうだ、疲れていたから、アイスクリームの中に目がある、なんて
幻覚を

見てしまったのだ。そう思い、恐る恐るアイスクリームを見直して
みた。

「目」は、消えていた。

安堵のため息を付いたと同時に、笑いが込み上げてきた。それは
そうだ。

我ながら、なんと突拍子の無い幻覚を見たものだろうか。いくら疲
れている

からと言って、酒も入っていないのに。いや、酒が入っていても、
まさか

こんな見間違いも起こさないだろう。明日、会社の同僚にこの話を
してみる

のも面白いかもしれないが、ヘンな薬でもやってんのか、と馬鹿に
されるのが
オチだろう。

そんな事を思いつつ、縁の辺りが溶けかけたアイスクリームを見
る。

この、溶けかけのアイスクリームってのも、甘さがより濃くなった気がして
これはこれで良いモノである。私は気を取り直して、アイスの中央部分に木の
スプーンをさくり、と入れた。

「イテッ！」

それから、どのくらい時間が経ったのかは分からない。
既に半分以上溶けてしまったアイスクリームに蓋をして、流し台に置いた。

そのまま玄関に向かい、サンダルを足に引っ掛けつつ、私は思った。

「……たまには、メロン味でも食べてみるか」

私は、蒸し暑い夜の街を、コンビニ目指して走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5480/>

アイスクリーム。

2010年10月9日18時42分発行